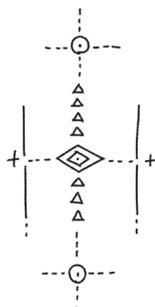


COSMOS集



子どもらとウクレレ弾けば児童館は優しき音色に包まれてゆく

着物 秋山幸子 千葉

寂しいと言ひたる母の手のひらをもつとやさしく包みたかつた

さはやかな朝に妣のスーツ着てともに祝ひぬ姪の七五三

近代のビルの谷間の日枝神社ひつそりたたずまざる神猿を拜す

わがために祖母の買ひくれし着物きて姪は帯解きの儀式にのぞむ

わたくしも妹も着た着物なり半世紀へて姪をかざれり

最後のおやつ 高木裕子* 神奈川

玄関の段差に転びしかの日より気丈な母が気弱になった

母の声が聞こえるような実家の居間施設にはいりもう七年目

大声で笑いし母が寂しげに老人ホームの輪の中に居る

好物のプリンを最後のおやつとし母は逝きたりお誕生日に

母の日にわれが贈りしブラウスをそっとかけたり旅立つ母に

豆まき 奥 呂美生 東京

袴と布のいわしでしりぞけむ鬼もマスクでにほひわかるまい

寒かると座布団作りあてがへばわらべの香合ひざを正せり

小さき豆まいて鬼遣らふ大きき豆まけば止まぬか二年の戦ひ

鯛よりほつけにしよう豆まきの夕餉の菜は多数決なり

豆をまき福の来たれるこの家の冬もほぐれて明日は立春

斎藤 梢選

「あすなる集」特選

茶色の煮物 水野 須美子* 宮城

栗駒山の麓に住みて四十年友は街への移転を決める

甘酒のほどよき旨さほのぼのとどんと祭の境内に飲む

ある時は体の不具合吐露しつつ十年目に入る写経教室

臘梅の満開なるも気づかずには近くの八百屋に急ぐ

思い立ちマンネリ献立変えにしがいつしかもとの茶色の煮物

こねこのスタンプ 斎藤 洋子 群馬

静まれる一人の夜に雪だけがわれの心に語りかけくる

公園の崩れかけた雪だるま作りし人を呼んでゐるやう

看護師と保健師試験受くる娘にこねこのラインスタンプ送る

受験子の不安げな声ききたるに「頑張れ」といへず母なればわれ

大野 英子選

俺を遺して 久保親二*東京

それでも俺ら弾んでいたつけ敗戦後の野球のボールは手縫いだつたが
暮れるほど光増しつつ自販機が道標として立つふるさとの村
父母の墓に手ぶらで寄り道す嬉しき日にも落胆の日も
山裾の草に憩いて風と木の交わす言葉をしばし聴きおり
そしてだから言ひあう口癖の友二人共に逝きしよ俺を遺して

チヨコレートの箱 本土和子*東京

泣きたき事あれど泣けないそんな時書棚にさがす「フランダーズの犬」
気がつけば指にもシワが出来ていた母に似た手をしじみと見る
窓開けて見上げる空に月明かし何も無き日の幸せ思う
受話機より洩れる友の細き声聞きのがさじと力込める手
ダイエツト宣言したがああ今日もいそいそ開けるチヨコレートの箱

白き窓辺 阿部直子 新潟

パンジーの花がら摘みてはなあそび小雪に散らす青いろ黄いろ
いつの日か子の困らぬやう髪型のままりしあした自撮りをしたり
ガラス瓶に赤黄みどりのアメを詰め二月の白き窓辺を飾る
冬枯れのコナラの林にひびきたるアカゲラの声、雪落つる音
長き脚ぞつくり伸ばし飛ぶ鷺のすみれ色の影夕ぐれのまぢ

ココアの香り 星野尚子*新潟

気づいたらなんだかお尻がこそばゆい今まで座つてた人の体温
キッチンにココアの香りがふるふるだ14日朝のチヨコレートプリン
誰かから受けた傷なら誰かからもらう絆創膏で癒されるもの
末っ子が立ち食い蕎麦にデビユーした小春日和の越後湯沢で
最後の日ひとつ祈るとするならば家族をみんな救つて下さい

焼きたてパン 小森鈴子 岐阜

凍てし指を湯につけやればジンジンと痛みてのちにほぐれてゆけり
久々の道の駅なり楽しげに夫は買ひをり焼きたてパンを
鴨たちが啄ばむたびに川岸の菜の花揺れるささやくごとく
深呼吸のリハビリをする夫の辺に息を合はせて医師も息吐く
里芋と葱たつぶりの味噌煮込み今宵の夫は完食をせり

原賀 櫻子選

冬と別れる 池田あつ子 愛知

節分の福豆ひとつ噛み砕き煎り具合良しと百歳の母
たつぷりと遊び疲れて帰る家福豆を煎る若き母居り
冬ごもりそろそろ終へむこの地球の地軸の傾ぎ心許なく
立春の窓辺にゆらり立ちながら屈伸運動くりかへしをり
頻繁に着たるとつくりセーターの毛玉増えゆき冬と別れる

甲辰の春 柴田有里*愛知

エンジンを切つて十分あと少しもうちょっとだけ車内でひとり
ため息を大きくひとつ吐き捨てて車を降りる仕事の帰り
価値観のちがいで言えばそれだけのただそれだけを流せない我
「もう二度学級閉鎖」と話す子よインフルエンザにはやばや罹り
雨あめと傘のマークが連なつて二月が終わる甲辰の春

大切なもの 田原五郎*京都

揺れながらバスから見てる雨の街灯台みたい信号の赤
収入と日々の支出を比較する慣れてしまったこんな仕事に
非力ゆえユニセフ募金に加入するなにもできないその免罪符
大切なものとは少し距離を置くドミノ倒しにならないように
公園のベンチをかこむ陽だまりに今年の春がひっそり立つた

溶けた休日 大池アザミ*兵庫

部屋を出た時と寸分たがわずに部屋はわたしの帰宅を迎えた
植木鉢せまいと呻くゴムの木の声が聞こえた団地の二階
草原でのんびりと草を食む牛のように一日本を読みたい
魂の欠片も乗せて行つてくれ行き先知らぬ夜更けの貨物
明日はまた仕事らしいな角砂糖みたいに溶けた休日だった

ゆほびか 高野哲司 兵庫

マダケにも学年カラーあるさうな今年の稗はぐうんと伸びる

「穰るだけ穰らせました」公園のタチバナモドキ柿色づきぬ
ハゼ標本じつくり検鏡する朝の上皇さまの青年の顔

無量光寺の塀のすきまに生き残るダンチクの穂のゆほびかなこと
心の中に土を持つこと教はりぬ団地に生ふるクゲヌマランに
鈴木 竹志選

しんきゅう 井上喜美子*山口

「しんきゅう」と広辞苑引けば十五個のしんきゅう出たり日本語豊か
針灸を受けて逸れたる針の跡ワインレッドに血の滲みいる
施設には多くを持つて行けないと思えば出来る服の終活
多分もう乗らないだろう自転車未練がましく軒下におく
前向きは無理でも後ろは向かないと青い服着て買物にゆく

女医さん 落合美代子 香川

背を擦りともががんばらうと女医はわれを励ますシスターのごと
ポリープの画像を指して「この子」とふ軽い調子に笑みがこぼれた
良性と告げられ安堵に力ぬけともに拍手のわれと女医さん
病室の窓より眺める駐車場娘の迎へ待つ退院の朝
夫と子の顔色うかがひ生きるのは難儀なこととこころが騒ぐ

ジ ム 友 牧野雅子*佐賀

寒き中よく来たとはめ我がおでこに指で花マルくれるジム友
ジム友ら皆若くして労りの言葉掛けくれ「ハイ、ハイ」従う

ズルズルとテレビを見続けジム休む小さな小さな罪悪感が
不登校の生徒の気持ち分かる今日理由なけれどジム休みまし
補聴器を使えと子から二度三度気づけばテレビの音量高し

大部屋の古株

鶴田 竹一 長崎

「患者さん」と声掛けられてああさうかと我に返つた入院初日に
作り笑ひも効果があるを思ひ出し入院ベッドで口角拡ぐ
病持つ男六人同室のカーテン越しに夜の沈黙
次々に退院すれば大部屋の古株となり募るわびしさ



小島 なお選

「その二集」特選

蔽

冬

竹内 幹夫 北海道

ひがし西いへは氷に囲まれてかぜ入らぬゆゑ温しと言ふが
ざしき犬路面凍りて歩かずと人はこぼしぬ手炙りながら
水点下ひとけたとなる昼なかをぬくしと言ふときくちびる震ふ
息こほり眼をうつ雪にそら仰ぐあふれる雪に霞む半月
雪暴れガラス戸がたがた揺れる中枯れ木の微かに笛吹く聞ゆ

認知症患者の駄々を聞き解く若き看護師夜勤の続く

見合い相手

小森田 より子*熊本

冬の湯に着ぐるみ脱ぐよに一発で男孫は服をぬぎすてるなり
たこ焼きかお好み焼きかを選ぶよに見合い相手を決めた日ありて
一休さんのチチンプイプイのポーズして頭皮マッサージやっているなり
満月が降りてきたかの晩白柚かかえて供える仏壇の前
コロコロとゴルフボールは転がりてフローリングを加速する家

知らない国の知らない草原

佐々木 真知子*宮城

雪景色テレビに映つたふる里の四万十川の赤い鉄橋
眠られず数える羊草食むは知らない国の知らない草原
スーパード夫が手に持つパイナップルもとに戻せと妻は目で言う
雪の中レインコートを着せられてゆるりゆるりと散歩する犬
テレビ消し音ない部屋にひとり居るただただ冬の薄日纏まといて

振り子

水鳥 葉子 茨城

海底に銀色のあこや貝しるがねきしきしと珠まるめゆるる春

今朝ひら咲くシンビジュームのつぼみには悩ましき舌隠れてをりぬ
手放した実家の住所もうなくてバスワードとしてわれに残れる
ほんたうに老いは来るのか身の裡の振り子しづかに揺れまどふ夜半
誰もみな誰かのことも母といふ空の遠かさをおもふ夕焼け

19 時 松下 誠 一*東京

きまぐれに降りやみもする雨の午後整頓された白鳥ボート
どこに居てもここではないと思いがながら手の甲に19時とメモする
文面がなんだか泣いている感じ 適当に2月をやりすこす
こいびとが起きないように鼻をかむそんなもんじゃないの生活は
僕はすぐ眠るし眠ったら起きない気が済むまでの散歩もながい

力を絞る 三木 康 史*東京

色の無い写真を見つめ、あの日々の光を探す力を絞る
風景をコトリと落とすスライドに生きた時間を確かめていく
若い頃聴き忘れてたレコードをダウンロードする三十年後
夜明け前まだ色の無い寝室で今にしかない寝顔見つめる
今ここにある色と陽と陰と音、掬い封じる、明日のために

木畑 紀子選

妻の LINE 上野 成*新潟

何よりもレントゲン写真一枚に妻の病が凝縮しおり
麻酔薬注入されてもうろうと妻あらむ入室後二十分

「LINE」来ぬ術後八日に抜糸して入浴したりと顔写真添え
老い猫も後ずさりしぬ湯上がりの髪ボサボサの妻の自撮りに
ようやく杖歩行できてうれしいと「LINE」をよこす妻の可愛さ

復興 保田 仁 美*富山

梵鐘の大きな音にゆらゆらと我の煩惱つられ出でゆく
冬の夜の凍てつく空に三日月がネコ爪のごと鋭く光る
信じたいあかねの空の向こうには希望という名の明日があること
復興は弛まず進む日曜にビブス着た夫現場へ向かう
地震からひと月過ぎた後のこと家のトイレのタイル崩れる

手首が重し 米谷 紀代志 石川

震度7脳細胞が虚きまとなれり四つん這ひにて逃げ場をさぐる
余震なか覚悟をなせり遠景に目線をやりて息深く吸ふ
避難先をスマホに互あひまに記録して手を振り離さかる手首が重し
たのもしき給水車に礼、川越市上下水道局と声にして読む
住民の荷重は切なし炊出しに並ぶ老若多く俯く

共白髪 椋本 信枝 静岡

句集二冊「ローカル線」と「指定席」国鉄マンの通夜に飾らる
寒鯖の昆布巻とろり煮ゆる夜に妣のことなど話す食卓
相性は悪しといはれて共白髪ときに思ほゆ誓ひの言葉
お向かひが空家となりて四年目のつんと真白き水仙の花
雨音が葉音になるを聴く夜の私は詩人卵手手に

みなぎるパワー

中村 泰子*京都

非力なをんな

岡崎 清和 香川

寒空にぽかっと大きな穴があく遠い異国の友の計報に

猫の手をまねて園児らパンパンとタンバリン打つおどろつつ打つ

じゃんけんに勝った勝ったと飛び上る四つの男孫のみなぎるパワー

右下と左上の歯治療中ハムスターのごと前歯が頼り

両親父を幼なはちゃんと言いいける「死んだじいじ」と「死なないじいじ」

狩野 一男選

ウクライナの春

山添 聖子*奈良

クリスマスローズのつぼみふくらみて自生地ウクライナの春思う

大きめのプロッコリーをかごに入れる森へ行きたくなくなった夕方

それぞれの面影浮かぶ「白馬」の字 教室の壁は草原となる

途中からにらめっこめく恵方巻きをしゃべらずに食べ終えられるのか

ふるさとの鮮やかな川の夢みるか二月の水族館のピラルク

声は静かに

川村 りら*鳥取

眠る子の預かりお守り頼まれて「ねんねねんね」の声は静かに

寝返りをうつ子のおでこ撫でながら起きてはダメと呪文唱える

目が覚めた孫は二語文「ばばめんめ」力いっぱい仰け反りて泣く

泣く子には困った時のユーチューブ大好きなのは「れんげつ」のうた

膝の上につみきで遊ぶ孫のせてつむじの匂い思い切り吸う

うとうととテレビを点けてのうたた寝は一日終へた妻へのギフト

わたしなど非力なをんなと言ふけれど家ではボクを指図してをり

曜日など忘れてしまふこの師走今日は日曜妻が家に居る

君のことはしためなどと思ふわけ無いでせうとも 四十年過ぐ

文句など一度も聴いたことは無いロボット掃除機妻の言ひ成り

君の気持ち

池田 花穂*福岡

いつか君と水族館に行けたらなイルカに向けてシャッターを押す

私のことどう思っているのだろう夜空に浮かぶ上弦の月

現れたり雲に隠れたりする月よ君の気持ちが知りたい早く

「顎にあるニキビは誰かに想われてる」それとてもしかして君ですか

どうしたら仕事が早く出来ますかどうしたら「君」と付き合えますか

いつもの日々

工藤 愛子*宮崎

病室で思いつくままペン握る短歌に励む時間たっぷり

手術前じつとはできずスクワット筋肉鍛え夫と散歩す

声聞こえパツと明るく目が覚めぬ音と光の世界に戻る

退院しさつま芋入りカレーライス夫の手作り甘さバツゲン

掃除してご飯作って風呂に入るいつもの日々が一番幸せ